一般質問

将来に負担を残さぬ施設計画を

但野 謙介 議員

問　今年3月に取りまとめられた施設白書について、今後30年間で859億円が必要となる。築30年以上経過で建て替え・大規模改修にさしかかる施設が53％にのぼる。復興予算の活用も含め、施設整備の見直しや再配置が必要ではないか。考えを伺う。

答　厳しい調査結果で、これらを順次建て替え、新たなものにしていくことは現実的ではない。施設の目的や利用者の要望等も聞きながら、今後新設が必要な施設については、統廃合や廃止等も含めて考えていかなければならない。

　そのためにも、基本的な方針をこの公共施設管理計画の中で示して、全庁的に公共施設のあり方について、協議研究していく。

問　大手企業が南相馬の現状をフィールドワークし、地域の課題を見つけ、新規事業に結びつける研修プログラムに取り組み始めている。県のイノベーションバレー構想と連動し、ここで事業を興し、人が豊かに暮らせるようにしていくために支援すべきと考えるが見解を伺う。

南相馬市施設白書

答　南相馬市の今の復興を考えると、内向きであってはならない。外部から人材を受け入れることが可能となるような受け入れ体制づくりも必要だ。様々な人がここにおいでになるような体制づくりに取り組んでいく。

質問を終えて

一昨年から問題提起してきた施設白書がまとまり、課題が明らかになった。

その他の質問

❶農家民泊を活用したツアー支援を

❷創業支援体制の充実を

超高齢社会を乗り切るには

田中 一正 議員

問　本市が超高齢社会となっている現在、高齢者の体力向上や介護予防のための施設充実について伺う。

答　原町老人福祉センターにおいて筋力向上トレーニングを実施している。機器の増設については利用状況に応じて検討していく。

問　筋力トレーニング事業は今後、希望者が多くなると予想されるが、その時に施設を増やす考えについて伺う。

答　当面は賄えると考えている。今後、超高齢社会の中で希望者が増えれば検討していく。

問　認知症予防対策について伺う。

答　予防は積極的に体を動かし、人と交流する等脳機能の活性化が重要である。ウォーキング教室を実施している。また認知症サポーターの養成や早期発見のための普及啓発等相談対応を行っている。

問　認知症には種類があり、早い対応で良くなるケースもあると聞く。認知症サポーターの現体制について伺う。

答　認知症サポーターになるには、認知症サポーター養成講座を受講する必要がある。現在949名だが、引き続きサポーターの数を増やしていく。

筋力トレーニング機器（原町老人福祉センター）

問　相談体制の市民への周知はどうか。

答　広報誌で周知している。今後、包括支援センターを核とした介護予防事業を展開する必要性を考えている。

質問を終えて

高齢化率が人口の21％以上が超高齢社会。本市は33.37％。早急な高齢社会対策必要。

その他の質問

❶交通弱者向けバスの運行は

❷本市土砂災害危険地帯の対策は

❸訴訟の再発防止と職員の適性管理は

距離による格差解消策は

鈴木 貞正 議員

問　平成18年に笑顔あふれるまちづくりを目指し合併した。原発事故後30キロ圏外に位置する鹿島区域は、何の区域指定も受けられなかった。しかし、福島第一原発からの距離で線引きされ、一方的に地域が分断された影響は現在も残り続けているが考えを伺う。

答　本市は、これまでも30キロメートル圏外と旧緊急時避難準備区域との間に、賠償格差が生じていることについて、これを同一の基準とし、公平な賠償を行うよう鹿島区行政区長会長とともに、国及び東京電力に対して重ねて要望・要求をしてきた。今年の4月から、原子力損害対策課を本庁に新設するとともに、各区にも地域振興課内に原子力損害対策室を設け、地域住民に寄り添った支援体制を整えたところである。今後とも、行政区長や関係機関との連携を図り、即した賠償を求めていく考えである。

問　地域社会づくりは、今、人々はそれぞれが自分らしい生き方を模索するようになってきている。人々の暮らしの場である各地域が、それぞれの個性・独自性を伸ばすとともに、多様化した住民のニーズに対応できる、ゆとりと潤いのある地域づくりが求められているが考えは。

災害公営住宅落成（鹿島区西町）

答　現在、復興計画、再生可能エネルギービジョンも含めた環境未来都市の計画を合わせ、南相馬市復興総合計画を策定中である。今後は、3区のそれぞれの特性、そして地域のいままでの歴史・文化をしっかりまちづくりに生かし、着実な復興を果たす考えである。

質問を終えて
外部の目、公開、現場目線を3本柱としての取り組みである。

野馬追の総括と今後の展望は

奥村 健郎 議員

問　相馬野馬追の本市における総括と、今後の展望をどう描いているのか伺う。

答　従来の固定日開催から7月の最終、土・日・月開催により、騎馬武者が出場しやすい環境と、さらには国内団体ツアー企画が増加するなど、執行側、観覧側、両面において相乗効果があったものと考える。

問　今年の観光客数は昨年を大幅に上回ったが、今後多くの来場者やリピーターをつくるため、通年型観光交流の仕組みが必要と考えるが。

答　野馬追に特化した通年型観光交流の取り組みは難しいと捉えている。幅広い通年型観光交流を目指し、野馬追を含む馬文化に関する歴史や史跡観光資源など、被災後の復旧・復興情報を紹介するメニューを追加拡大する。また、観光交流の仕組みを再構築し、新たな観光客の誘致や交流人口拡大に取り組む。

問　通年で観光客を惹き付ける目玉的なものとして、馬文化での甲冑姿や陣羽織姿での撮影企画、古式馬具による乗馬体験や馬車を交通手段とした見学ツアーなど、民間企業や旅行会社と連携した新たな観光を考えるべきと考えるが。

答　さまざまな武具・馬具など、年間を通じ有効に活用していきたい。最近では銘醸館において一般の方に鎧を着ていただいた。震災前は乗馬体験もあり、今後、年間を通じた馬文化の伝承と観光PRを行う。

相馬野馬追御行列（7.26）

質問を終えて
「相馬野馬追」世界に誇れる馬文化。
目指せ「世界無形文化財遺産」登録へ。

その他の質問

❶夏季特例宿泊の実施結果と今後は

❷農業復興の取組状況と今後の考えは

❸鳥獣害対策の現状と今後の対策は